經濟論叢

第136巻　第4号

大野英二教授記念號

献　　辞……山田浩之
J. ハーバーマスにおける批判的社会理論の倫理的基盤……平井俊彦　1
競争・独占・独占禁止法……越後和典　22
1932年のアニェッリ提言をめぐる覚書……丸山優　39
19世紀末ドイツのオリエント認識……杉原達　60
第一次大戦期ドイツにおける住宅政策の展開…後藤俊明　80
日中戦争前中国安徽省における茶統制政策……川井悟　111
リッカートとランプレヒト論争……奥田隆男　130
中世イングランドの鋳貨……本山美彦　149
大野英二 教授 略歴・著作目録

昭和60年10月

京都大學經濟學會

19世紀末ドイツのオリエント認識

——皇帝のオリエント旅行に関する新聞報道を素材として——

杉　原　　達

I 問題の所在

1898年秋，ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世（Wilhelm II.）は，1ケ月余りに及ぶオリエント旅行を行なったが，この旅行を契機にして，ドイツ世論におけるオリエントへの関心は，一挙に高まることになる。本稿は，皇帝旅行をめぐる新聞報道の分析を通じて，19世紀末ドイツにおけるオリエント認識の構造を解明することを，目的とするものである。そこで皇帝旅行の反響に関する研究状況を，その方法と史料に即して概括することによって，問題の所在を示すことにしよう。

まずドイツのオリエント政策史に関する総合的研究であるラートマンの労作では，皇帝旅行は，「世界の新たなる分割をめぐる闘争におけるドイツ帝国主義」の展開の中に位置づけられ，翌1899年のバグダード鉄道仮協定締結に至るドイツ金融資本のトルコ支配を保証したものとして把握されている。それゆえ皇帝旅行に対する反響については，「ブルジョアジーの数多くの新聞がもらしたドイツ帝国主義の侵略的意図」を明らかにするという観点から，若干の論説が紹介されるにとどまり，立ち入った内容分析は行なわれていない[1]。

これに対してファン・カムペンは，皇帝旅行の社会的機能として，一般のドイツ国民が，自国の威信をいやが上にも高めた皇帝を誇りと感じ，帝国のオリエント政策に広範な支持を与えるに至った点を重視し，この観点から反響の分

1) L. Rathmann, *Die Nahostexpansion des deutschen Imperialismus vom Ausgang des 19. Jahrhunderts bis zum Ende des Ersten Weltkrieges*, (Habl.) Leipzig 1961, Tl. 1, S. 180 ff.

析を試みている。しかし旅行をめぐる新聞報道に関しては，史料を前述のラートマンの著作に依拠するという制約のために，著者本来のシャープな世論分析が，生かし切れていないように見うけられる[2]。

ところで近年シェルゲンは，1890年代から1910年代にかけての多様な出版物の中に示されたオリエント像を総合的に分析するという，注目すべき研究を発表した。しかしその基本的な問題意識は，オリエントにおける独英対立が，第1次世界大戦の原因として，どのような位置を占めたかにあるため，せっかくの浩瀚な世論分析も，ドイツのイギリスに対する敵対と羨望の感情が過度に強調されて，必ずしも立体的にはなっていない。また新聞報道のもつ独自なレベルについては，「固有の研究価値」を認めつつも，分析は最初から断念されており，さらに言えば，一般的なドイツ人がどのようなオリエント像を持っていたのかを問題とする意識は，全く感じられない[3]。

帝国主義的ナショナリズムは，いきなりブルジョアジーのイデオロギー操作に帰着させたり，外交的な緊張関係のバロメーターとして扱うことによっては，その問題点を十分に把握することはできない。それが，①いかなる形で社会意識として潜在的に存在しており，②いかなる契機によって前面に登場し，そして③いかなる論理構造をもって普及・定着していったのかを，具体的問題に即して明らかにすることが必要ではあるまいか。その作業を通じてこそ，ナショナリズム研究は，帝国主義の社会史的把握に寄与することができるであろう。

以下では，研究史上なお空白である皇帝旅行に関する新聞報道の分析を通じて，上記の②，③の課題にアプローチを試みたい[4]。

---

2) W. van Kampen, *Studien zur deutschen Türkeipolitik in der Zeit Wilhelms II.*, (Diss.) Kiel 1968.

3) G. Schöllgen, „Dann müssen wir uns aber Mesopotamien sichern!", in: *Saeculum*, Bd. 32, 1981.

4) 新聞史料は，Zentrales Staatsarchiv (Potsdam) の Pressearchiv を利用した。なおここで，課題①について若干述べておきたい。皇帝旅行が，オリエント熱を一挙に高める契機となるだけの企画であったとするならば，逆に，皇帝旅行をして，契機たらしめるだけの社会的共鳴盤が存在していたことが重要である。オリエントに関わる帝国主義意識の大衆的形成に，おそらく最も大きな役割を演じたものは，カール・マイ (Karl May) の冒険物語であった。↗

II 皇帝のオリエント旅行に関する報道

(1) 皇帝旅行の概要

まず旅行の概要を，報道記事に即しながら確認しておこう[5]。

この旅行の直接の目的は，皇帝自らをはじめとする，ドイツ全国のプロテスタントからの寄進によって，エルサレムに建設された救済教会の落成式に，皇帝夫妻が出席することであった[6]。それはまた，パレスチナに独・英プロテスタント司教区を設立したフリードリヒ・ヴィルヘルム4世(Friedrich Wilhelm IV.)，そして1869年に聖地を訪問し，新教会建設のために土地を購入したヴィルヘルム1世（Wilhelm I.）の伝統に従うものでもあった[7]。

皇帝夫妻は，ヴェネチアを経て，1898年10月18日イスタンブルに到着する。この帝国首都で皇帝は，スルタンと会見し，また対岸を起点とするアナトリア鉄道を利用して，コンスタンチティヌス大帝（Konstantin der Große）の墓の

＼万能のドイツ人主人公が，忠実な回教徒の「召使い」と共に，オリエントの各地を舞台に大活躍を展開するというストーリーは，聖書によって子どもの頃から形成されてきた，ドイツ民衆の潜在的なオリエント・イメージに，今一度生き生きとした表象を与え，彼の地への大衆的な夢をかきたてるものであった。折しも，マイが以前に週刊雑誌『ドイツ家庭文庫』に寄稿していた多数の小説を集めて，1892年から『カール・マイ旅行物語全集』が刊行中であった。その人気は，1896年から98年にかけて絶頂に達し，ついに99年3月，バイエルンの図書館では，マイ作品への熱中が学業の妨げになることを懸念して，青少年への貸し出しを停止したほどであったという。(『カール・マイ冒険物語』エンデルレ書店，1977年～，の各巻，とくに第1，14巻の解説を参照。なお『旅行物語全集』は，1912年までに33巻に達し，合計161万部が発行されたという。)

商品・資本輸出の次元や，外政的次元だけではなく，ドイツ社会のどこかに住み，働き，年老いていった普通のドイツ人たちにとっての帝国主義の歴史的意味を問おうとする時，視野に収めるべきこの問題領域の検討については，他日を期したい。

5) 旅行に先立って，すでに若干の報道がなされていることに，後論との関係で，留意しておきたい。1898年春段階から，イスタンブルやハイファ，エルサレムなどにおける道路改修や人的配置など，皇帝旅行のひための準備の進行具合が，有力な右翼団体である全ドイツ連盟の機関紙のみならず，一般新聞でも伝えられていた。たとえば，イスタンブルにある技術学校のドイツ人教授が，パレスチナへ赴いて，皇帝上陸を迎える作業の監督として勤務していることが，報じられている。*Alldeutsche Blätter* v. 1. 5. u. 26. 6. 98.

6) プロテスタント高等宗教法院長から外務次官あての手紙（1897年8月27日付）では，翌98年には教会が完成する見込みであり，落成式には皇帝夫妻が臨席する予定であることが述べられている。*Die Große Politik der Europäischen Kahinette, 1871-1914*, Berlin 1922 ff., Bd. 14-2, S. 557 f.

7) van Kampen, S. 135.

あるヘレケを訪問している[8]。同道したドイツ銀行頭取ジーメンス（G. v. Siemens）によれば，皇帝は鉄道に非常に感激し，「バグダード鉄道という巨大な文化事業は，彼にとって生き生きした概念となった。彼は，この大計画に，従前よりも多くの助力を与えることを決めた」[9]という。

10月22日，ヨット「ホーエンツォレルン号」でボスポラス海峡を南下し，25日ハイファに到着。ドイツ人入植者とりわけヴュルテムベルク出身のテンプル騎士団員と会見。26日早朝，皇帝一行は，砂ぼこりの中をトルコ近衛騎兵隊に先導されて，60～70台の車でハイファから海岸沿いを南下した。その行列は，実に3kmに達したという。

27日夕方，サロナのドイツ・テンプル騎士団入植地へ。集結した700～800人のドイツ人の「皇帝万歳」の歓呼にこたえて，「聖地のドイツ人がドイツ的教養，ドイツ文化を正しく保持し，さらに推進しようと努力しているのを見ることは喜ばしい。」「大オスマン帝国の崇高なる支配者と手をたずさえて進むという，私がとってきた政策は，諸君が繁栄し，安寧と平和のうちに暮らせることを保証する。」「帰国したら，忘れずにヴュルテムベルク国王に，私がここで見たことを電報で知らせよう。今回の私の旅行が，ドイツ人の勤勉さ，ドイツの労働，ドイツの文化がこの地で一層の発展をとげることに，助力するであろうことを望み，また疑わない」[10]（強調は原文，以下同じ）と演説している。同夜，ヤッファ着。

10月29日エルサレムに入る。カトリック，ギリシャ正教，ユダヤ教を含む種々の団体の代表を接見[11]。ドイツの慈善事業を見学。エルサレムでも，「はじめてドイツ皇帝に接し，また遠く離れたオリエントにあっても，ドイツ帝国の強力な保護の下で，安らかな確信をもって生活し活動できるのだということを，

8) この小旅行の詳細については，*Deutsche Zeitung* v. 6. 11. 98.
9) K. Helfferich, *Georg von Siemens*, Berlin 1923, Bd. 3. S. 88 f.
10) *Berliner Tageblatt* v. 11. 11. 98.
11) *Augusburger Neueste Nachrichten* v. 4. 11. 98.

皇帝自身の口から聞けることに大変感激しているドイツ臣民たち」[12]の，心よりの歓待を受けている。10月31日は，この旅行のクライマックスであった。プロテスタントの救済教会落成式に参列した皇帝は，同日，カトリック側にも，購入していた聖母マリアゆかりの土地を，委託したのである。この点は後述しよう。

11月4日にエルサレムを発ち，汽車でヤッファへ。そこから船で，6日ベイルートに到着。翌7日には鉄道を利用してダマスカスへ向かい，そこで住民の大歓迎を受ける。8日には，12世紀末に十字軍との休戦条約を締結し，エルサレムへのキリスト教徒の巡礼を認めた寛容精神によって，ヨーロッパでも文学その他でとりあげられてきたスルタン・サラディン（Saladin）の墓参を行なう。同日夜，市役所での晩餐会において，イスラム側の歓迎演説にこたえて，「スルタンおよび地球上に散在しながら彼らのカリフを尊敬する3億の回教徒は，いかなる時でも，ドイツ皇帝が友人であることを確信できる」と述べた。「ドイツ皇帝のダマスカス演説」として有名なこのアピールは，とりわけ自国ならびに植民地領内にムスリムをかかえる列強の新聞に取り上げられ，きびしい非難を浴びることになる。

そして最後の訪問地は，ヘレニズム様式の遺構で有名なシリアの古都市バールベク（ギリシャ名はヘリオポリス）であった。「ホーエンツォレルン号」は，12日にベイルートを出航し，旅行の公式日程は終了する。26日にポツダムに戻った皇帝は，12月1日ベルリンに歓呼をもって迎えられた[13]。

(2)　報道に示された皇帝旅行の成果の諸側面

以上の日程で行なわれた皇帝旅行は，それでは，どのような成果をあげたものとして報道されたであろうか。4つの側面に分けて紹介しよう。

(a)　宗教的側面

10月31日――すなわちルター（M. Luther）が95ケ条の提題をかかげた新教

12)　*Berliner Neueste Nachr.* v. 5. 11. 98.

13)　以上，種々の報道のほか，Rathmann, van Kampen も参考にした。

の記念日である――，多くのプロテスタント代表者の列席の下で，エルサレムの救済教会落成式が盛大にとり行なわれ，今回の皇帝旅行の直接の目的は，成功裡に達成された。だが当時の新聞報道では，実はこのこと以上に熱っぽく論じられたのが，オリエントにおけるドイツ人カトリック教徒の問題であった。

まず第1に重要な論点は，皇帝が聖母マリアの臨終の地といわれるエルサレムの一角を購入し，これを聖地のドイツ人カトリック協会に寄進したことである。そして第2に，各紙が競って報道したのは，ドイツ皇帝が，従来ローマ法皇にも支持されてきたところの，オリエントの全カトリック教徒に対するフランスの保護権を否定し，ドイツ人カトリックを自らの庇護の下に置くことを宣言した点である。皇帝は，テンプル騎士団入植地で，次のように演説した――「諸君のうち，誰か一人でも私の保護を必要とする者がいるなら，私はその場にいよう。いかなる宗派に属していようと，その人は，私を頼りにすることができるのだ。幸いにもドイツ帝国は，外国に在住する国民に対して，継続的な保護を行なえる状態にある」[14]と。

フランスの反発が強烈であったことは当然だが，そのことは，現地はもとよりドイツ国内のカトリックをして，一段と国家と皇帝に忠誠を誓わせる契機ともなった。また逆に，ヴィーンの1新聞の論評――「ヴィルヘルム皇帝は，カトリックを第二階級の臣民とはみなしておらず，彼らは万一の場合には，皇帝の強力な干渉を期待できることへの最も明白な証をたてた」[15]――が，共感をもって引用されるという場合もあった。

ところでサロナのテンプル騎士団の代表は，イギリス人記者に次のように語っている。「我々が，1869年に当地へ来た時には，ぶどうは全くなくて，わずかに若干のオリーブ畑があっただけだった。土地は，今でこそ豊かだけれども，当時は荒れ地だった。ハイファからナザレへ向う最初の良い道は，ドイツ人がつくった。たいていのオリーブの森もそうだ。……パレスチナは，元来ぶどう

14) *Hannov. Cour.* v. 16. 11. 98. この主張は，フランスとの衝突のみならず，「ローマとプロテスタント・カイザーとの静かな闘い」とも形容された。*Deutsche Z.* v. 6. 11. 98.

15) *Westfälischer Merkur* v. 7. 11. 98.

の地なのだが，すたれていたぶどう栽培を再興させたのも，ドイツ人だった」と。ここには，実績に裏付けられたドイツ人としての自信が感じられる。そして「トルコ人と修道士が，800年間かかってやった以上のことを，ドイツ人は30年間で成し遂げた」[16]とのイギリス人の観察は，ドイツ国内の一般読者をして，聖地におけるドイツ人のこうした地道な「努力」への敬意を呼び起こし，彼らに対する皇帝の配慮を，正当な激励と受けとめさせたであろう。

皇帝の帰国後，旅行が残したドイツ称賛のすばらしい反響に関する，シリア在住のドイツ人カトリック教徒の手紙が積極的に新聞に掲載されることも[17]，カトリックの体制内統合を促進するものであった。こうした意味で，「国民的感情が，カトリック教徒の心情のうちで揺り動かされたことは，ドイツ帝国の国内的発展にとって見逃すことができない」として，皇帝旅行の成果を，経済的利益と並んで「国民的自己意識の増大」[18]に求めた論説，あるいは「皇帝のオリエント旅行は，平和の徴表を示している。それは，単に外政の領域のみならず，宗教的平和つまりわがドイツ国内におけるキリスト教両派の平和共存という意味においてでもあった」[19]と述べる論説は，鋭い把握と言わねばならない。まさしく聖地における両教会への寄進が，巧妙にも同じ日に行なわれたという事実が，宗派を超えて皇帝を結節軸とする国民的な威信の形成を，いやが上にもすすめたのであった。

(b) 軍事的側面

トルコの対ギリシャ戦争（1897年）に際して，ドイツの武器とドイツ式の軍隊教育が果たした貢献に対すトルコ側の高い評価は，もとよりドイツ軍部・政治指導部には意識されていたとはいえ[20]，一般には，ヨーロッパ辺境での局地

16) *Berl. Lokal Anz.* v. 16. 11. 98. なお *Deutshe Z.* v. 17. 2. 99. によれば，入植者数は，ハイファ517人，サロナ243人，ヤッファ320人，エルサレム302人となっている。
17) *Berliner Neueste Nachr.* v. 1. 12. 98.
18) *Norddeutsche Allgemeine Zeitung* v. 15. 11. 98.
19) *Märkische Volkszeitung* v. 9. 11. 98.
20) 拙稿「ドイツ帝国主義における内政と外政」，川本和良 他編『比較社会史の諸問題』未来社，1984年，185ページ以下を参照。

的戦争が，ドイツ世論をにぎわせることはなかった。だが今や，旅行中の皇帝がイスタンブルやハイファで，ドイツ式スタイルをとるトルコ陸軍を閲兵するという状況の下で，ドイツ・トルコの歴史的な軍事関係の蓄積の結果として，対ギリシャ戦争勝利が位置づけられることになってくる[21]。「プロイセンは，フリードリヒ大王以来，強力で親ドイツのトルコが，ロシアに対抗する上でいかに価値のあるものかを認識してきたか」[22] として，反ロシア・親トルコの伝統が強調されるわけである。かつて対エジプト戦争に，トルコ側士官として従軍したモルトケ（H. v. Moltke）の名前が浮上してくるのも，けだし当然のことであった[23]。

またハイダルパシャの築港や，アナトリア鉄道の延長問題にしても，起点となるハイダルパシャが，昔からオスマン軍の結集にあたって重要な戦略的要地であることが強調され，トルコ軍の強化に貢献するという角度からも論じられている[24]。こうした軍事的観点は，対ロシアという戦略と結びついてドイツ・トルコの「同盟」の提唱[25]，あるいは一層あからさまに「将来の世界大戦において，勇敢で，よく装備・訓練された30～40万の陸軍が，ドイツ側に立って闘うとは，まことに安心なことである」[26] といった議論となって表現されている。

だが皇帝旅行は，単に，ドイツのテコ入れの成果として，軍事同盟の相手にまで急成長したトルコの軍事的実力に対する，ドイツの一般的関心を高めただけではなかった。10月27日，テンプル騎士団入植地サロナを訪れた皇帝は，大観衆を前にして，ドイツ人入植者と次のような感激的問答を行なっていたことが，報じられている。

「皇帝は，近くに立っている入植者にたずねた。『どこで勤務していたの

21) *Alldeutsche Blätter* v. 1. 5. u. 26. 6. 98, *Kölnische Zeitung* v. 30. 9. 98, *Frankfurter Zeitung* v. 9. 11. 98.
22) *Reichsbote* v. 11. 11. 98.
23) *Rheinische Westfälische Zeitung* v. 1. 2. 99, *Berl. Lokal Anz.* v. 9. 2. 99.
24) *Berl. Lokal Anz.* v. 9. 2. 99.
25) *Reichsbote* v. 11. 11. 98.
26) *Rheinische Volksstimme* v. 15. 11. 98. *Pfälzisches Tageblatt* v. 15. 11. 98.

か？』彼は直立不動の軍事的態度で返答した。『ヴュルテムベルク第3歩兵連隊第121小隊であります。』『故郷を離れて何年になるか。』『11年であります，閣下。』『ヴィルヘルム大帝の下で，大戦闘に参加した経験があるか。』『もちろん，参加いたしました。』『カール帝の下でもか。』『はい，閣下。』」[27]

この簡潔な会話には，〈絶対的権威をもった指導者としての皇帝——その尖兵としての入植者〉という構図が，はっきりと示されている。こうした報道が，ヴュルテムベルクの騎士団関係者のみならず，一般国民の志気を高め，国家と皇帝に対する忠誠心に，ストレートに訴えかける効果を持ったことは，疑いを得ないであろう。

(c) 外政的側面

独土軍事関係に対する関心の増大は，興隆する世界強国ドイツにふさわしい国際的地位の要求と結びついていた。「小アジアやメソポタミアからペルシア湾に至るまでのドイツ人は，朝鮮におけるロシア人，エジプトにおけるイギリス人と，比肩できる存在でなければならない」[28]という主張が，それにあたる。ではトルコの中で，ドイツ人はどのような立場を主張するのか？ イギリスのオスマン帝国解体提案に反対して，トルコの領土的主権を保証し，更に国土の開発にテコ入れしようとしているドイツとしては，その「代償」としてトルコに対して「特権ある家族的友人」たる地位を要求する権利がある。「それは，家がその友人のものではないにしても，そこでは，家にいるのと同様に感じることができるというようなものでなければならない。」[29]

次にトルコをとりまく情勢はどうか。ある論説によれば，不安定なトルコの国家制度は，北からはロシア，南からはイギリスによって脅かされており，このままでは「ヨーロッパのアフガニスタン」になる危険性がある。これに対して，ドイツのフロンティアたるべきオーストリアに信頼がおけない以上，ドイ

27) *Berl. Tageblatt* v. 11. 11. 98. パレスチナの軍事的意義については，*Westfälischer Merkur* v. 18. 11. 98.
28) *Deutsche Z.* v. 6. 11. 98.
29) *Ibid.*

ツ帝国は，自ら中部ヨーロッパの強国としての任務を果たさなければならない。したがって「我々は，ドイツ皇帝が『全力で』東南の方向へ赴いたことに，心より感謝の意を表明するものである」[30]という主張が，展開されている。そこには，トルコに対する権力政治的な関係を深める上での重要なワンステップとして，この皇帝旅行を位置づける発想がうかがえるであろう。

ところできわめて興味深いのは，皇帝旅行に対する列強世論の反応を，ドイツの新聞がどう取り上げたかである。まず第1に目を引くのは，後発帝国主義たるドイツが，列強に対して持っている民族的ルサンチマンを組織して，強国志向へのエネルギーに転化しようとする方法であり，とくにハイダルパシャ築港をめぐって高まった，フランス側のドイツ非難の報道のしかたにうかがえる（後述）。

だが他方では，列強がいらだちながらも，ドイツを新興帝国主義国として評価せざるを得なくなっていること，逆にいえば，ドイツの世界強国としての地位要求は当然であることを，ドイツの一般読者に説得するという方法もみられた。たとえば歴史的な宿敵たるロシアにおいて，今や「嫉妬心をまじえながら，ドイツの世界的地位に対する敬意の念が生じている」[31]と，在ペテルブルクのドイツ人特派員から通信が寄せられ，またイスタンブルからは，イギリス大使館の一等通訳官の話として，イギリスが「ロシアに対抗して，スルタンを擁護するのを怠ったこと」を自国の「最大の罪」として嘆き，「我が皇帝のエネルギーに嫉妬心をいだいていた」[32]との報道が伝えられるという具合であった。

(d) 経済的側面

トルコの経済的利権をめぐる列強の対立は，たとえばスミルナの電化事業に関して，イギリス資本の介入に対し，ジーメンス社の既得権を「全力で擁護し

30) *Berl. Neueste Nachr.* v. 2. 12. 98. この記事は，"*Grenzboten*" よりの引用。なお，「全力で」東南へ，というスローガンは，*Alldeutsche Blätter* v. 6. 11. 98. に見られる。
31) *Münchner Allgemeine Zeitung* v. 17. 11. 98. 反ロシア報道は，枚挙にいとまがない。
32) *Deutsche Z.* v. 6. 11. 98.

なければならない」[33]というイスタンブルからの報道にみられるように，一段と激しくなっていた。そうした中で，皇帝がベルリン帰還後おこなった「ドイツのエネルギーと実行力に新航路を開くことに，オリエント旅行が寄与したことを望むものである」[34]という演説は経済界に大きな衝撃を与えるものであった。その際，とりわけパレスチナ貿易への期待と，ハイダルパシャ築港問題が，世論の焦点を構成することになる。

まずパレスチナについて。すでに1890年代に入って以来，「パレスチナ開発協会」は，同地が「今日なお植物を生長させる昔日の力を維持しており，ミルクと蜂蜜に満ちあふれたかつての地に改造することは容易である」[35]との調査結果を発表して，パレスチナの経済的位置への注目を促していたが，皇帝旅行の直後には，さっそくフランクフルトでパレスチナ博覧会が開催され，反響を呼んでいる[36]。

オリエント貿易の将来性への期待は，貿易航路の充実への訴えにも示された。ドイツ化学工業利益擁護協会は，ドイツ工業家中央連合の支持の下で，ドイツ・地中海航海会社——1892年からハンブルクとアレキサンドリアを往復[37]——に対して，シリア・パレスチナへの寄港を要請し，新通商条約締結中央本部も，同航路の寄港地拡大のために，政府に対して支持を働きかけるという報道も相次ぎ[38]，新聞独自の論説としても，オーストリアやフランス政府は，自国海運業へ補助金政策をとっていることを論じて，ドイツ政府の積極的方策を訴えている[39]。

ドイツ・パレスチナ銀行の活躍も，大いに注目を集めている。というのも同

33) *Frankfurt. Z.* v. 1. 12. 98.
34) *Reichsbote* v. 8. 12. 98. Vgl. *Vorwärts* v. 2. 12. 98.
35) *Westfälischer Merkur* v. 11. 12. 98. Vgl. *Münchn. Allg. Z.* v. 20. 11. 98, *Nordd. Allg. Z.* v. 27. 11. 98.
36) *Frankfurt. Z.* v. 5. 12. 98.
37) *Berl. Börs. Zeitung* v. 11. 11. 98.
38) *Reichsbote* v. 8. 12. 98, *Berl. Neueste Nachr.* v. 20. 12. 98, *Post* v. 25. 12. 98.
39) *Berl. Börs. Z.* v. 11. 11. 98, *Berl. Lokal Z.* v. 9. 2. 99.

行が，今回の旅行団に対して相当の便宜をはかったのみならず，ドイツ人カトリック協会へ寄進するために，聖母マリアのゆかりの地を購入した資金も，ベルリンの銀行フォン・デア・ハイト（von der Heydt）の支援の下で，同行が調達していたからである。その経緯には，1896年に創設された同行監査役会には，プロテスタントが多数とはいえ，2名のカトリック中央党議員が名を連らねていたという，政治的事情も関係していたと思われる[40]。

次に，ハイダルパシャ築港問題をみよう。実は皇帝旅行の以前から，工事をめぐって，フランス系の埠頭会社が建設権を主張し，それをフランス大使館が支持して，ドイツ側と対立していた[41]。だが皇帝旅行は，事態を一挙にドイツ側に有利に進めた。築港権の獲得への期待は，翌年1月29日に，スルタンの勅令がドイツ側に下されたことによって実現された。以後2月にかけて，各紙は一斉にこの〈勝利〉を取り上げ，勅令が「アナトリア鉄道に対してはもとより，更に，ドイツの熱心さと貿易とを，スルフンがいかに高く評価しているかを示すもの」であり[42]，「こうした喜ぶべき獲得は，このたびの皇帝旅行によって根本的に推進された結果であった」[43]として，両指導者の偉大な役割を賛美し，両国の友好を強調するキャンペーンがはられた。

ところで，認可獲得に奔走するフランスの動向については，フランス側のドイツ非難を含めて，詳細にフォローされていたが，勅令発令は，苦しい闘いの後についにフランス・ナショナリズムを打倒したという，一種の自信を自覚させる役割を果たした。一例をあげるならば，「“Temps”紙は，フランスの異議申立てによって，勅令はアナトリア鉄道には出されていないという。“Figaro”紙は，フランス大使に〔勅令が下されていないので――引用者〕抗議などしていないという。だがいずれの主張も誤っているのだ。抗議は実際，行なわれたのであり，予想通り，何の成果もあげなかったのである。認可はアナトリア

40) *Post* v. 16. 12. *National Zeitung* v. 17. 12. u. 19. 12. 99.
41) *Alldeutsche Blätter* v. 1. 5. 98.
42) *Nordd. Allg. Z.* v. 1. 2. 99.
43) *Berl. Neueste Nachr.* v. 31. 1. 99.

鉄道会社に，最終的に下されたのだ」[44]と，フランス側の主張を論駁しながら，ドイツの勝利を誇示する報道は，当時の雰囲気をほうふつとさせるものといえよう。

以上，4つに分けて紹介した各側面は，もとよりそれぞれが並列的に存在したわけではない。たとえば，プロイセン・ドイツのトルコに対する軍事的伝統と，武器と軍隊教育のドイツ化を強調する論潮は，独土経済関係を強化すると共に，国際的な対抗の中で，ドイツの威信を認知させることでもあった。

また経済的側面に関しても，皇帝旅行は，単に何らかの利権をドイツにもたらすという意味だけ報じられたのでは，決してなかった。むしろ旅行が，オリエントにおける「ドイツ人の名声を高めるために寄与したことによって，独土経済関係の進展に実り豊かな影響を及ぼすものである」[45]という評価のしかたこそが，主要な論潮であった。たしかに一方では，トルコの苦しい財政事情を指摘して，独土関係に対する過度の期待を戒める論説があり[46]，他方では，農業利害の観点から，国内救済に向けるべき資金の外国投資を非難する議論もみられる[47]。しかし，にもかかわらず，皇帝旅行をめぐる報道の圧倒的部分は，ドイツのオリエントへの関わりを「国民的な文化事業 (nationales Kulturwerk)」[48]とみる立場にあった。

かくして，各側面は互いに他を前提とし，また補いながら，オリエントに対する国民的関心の昂揚に貢献したのであった。

III　オリエント認識の構造

本節ではすすんで，前節でみた皇帝旅行の諸成果をめぐる報道の背後に存在

44) *Ibid.*, v. 18. 2. 99.
45) *Hamburg Corr.* v. 17. 12. 98.
46) *Münch. Allg. Z.* v. 17. 11. 98.
47) *Deutsche Agrar Zeitung* v. 15. 11. 98.
48) van Kampen, S. 262.

している，オリエント認識の枠組を，掘り下げて検討しよう。

皇帝自らが「巡礼の旅」と称したパレスチナ旅行において，十字軍の輝かしい伝統に対する敬意の表明は，当然にも行なわれた。またドイツ人入植地に赴いて軍事的閲見を行ない，聖地における感激的な対面を果たしたことが報じられているのは，すでに見たとおりである。その際，イスラム教に対する宗教的偏見には，なお根深いものがあった。たとえば「他の信仰に対するイスラム側の嫌悪感や人種的思い上がりが，常に，あらゆる文明化と諸改革に対する主要な障害であり続けてきた」のであり，「イスラムの神学的偏見を打破する突破口を開いた」ところに，皇帝旅行の「最も豊かな成果」[49]を見出すというような論潮は，なお公然と展開されている。

とはいえ，時代は確実に変わっているのだ。同じ論説は，続けて次のように述べている――「トルコをヨーロッパ文化圏に完全に引き入れるか否かは，この障害が除去できるかどうかにかかっている」[50]と。そしてその「障害」を取り除くための異教徒「征服」を，戦争によってではなく，「技術」や「文化」によって行なうという思想が，皇帝旅行の成果に関連しながら浮上してきたのである。以下，中世十字軍との対比では「現代の十字軍」思想とも呼ぶべき考え方の特徴をみよう。

まず第1に，現代の十字軍一行を率いる皇帝が，どのような指導者としてイメージされていたのかを検討しよう。すでにみたように，当時の新聞では，ハイダルパシャ築港とバグダード鉄道への展望は，ドイツ銀行あるいはアナトリア鉄道会社の〈勝利〉としてではなく，明らかにドイツ帝国とヴィルヘルム2世の〈勝利〉として，そしてだからこそドイツの国民的勝利として，報道されたのであった。この意味では，旅行の当事者が，経済界を代表するジーメンス（ドイツ銀行頭取）でもなく，また練達の外交家マルシャル・フォン・ビーバーシュタイン（Marschall v. Bieverstein, 駐トルコ大使）でもなく，ドイツ帝

49) *Berl. Neueste Nachr.* v. 2. 12. 98.
50) *Ibid.*

国の権威を人格的に体現するヴィルヘルム2世その人であったことの意義は，まことに大きかったと言わねばならない。

では皇帝は，どのような存在として，一行を率いたのか。ここで注目すべきは，「いかなるキリスト教徒にとっても最も神聖なものである古代に対しても，我が皇帝は，全くドイツ人として，また現代人として」[51]ふるまったことが賞讃されている点である。つまり皇帝は，キリスト教文化の源たる聖地への巡礼者たるのみならず，ドイツ国家の代表者であると同時に，現代技術文明の体現者として（たとえばアナトリア鉄道の一区間を乗車することによって，ドイツ文明の力量を誇示するというように），今回のオリエント旅行を実現したのである。

第二に，中世とはちがって「非常に平和的なやり方をとる征服」[52]という考え方が出されているのが注目される。では「平和的征服」とは何か。たとえばハイダルパシャ築港に対するスルタンの認可に即して考えるならば，それを，往々にしてみられるように，単にドイツ資本がフランスとの競争にせり勝って受注に成功したという，直接的・経済的効果だけでとらえることはできない。築港権の獲得は，「我々の皇帝が，オリエントの経済的向上および同地におけるドイツの文化事業の促進に，関心を寄せていることは有名である」[53]（強調は引用者，以下同じ）という文脈において報じられている点にこそ，注意を払う必要がある。つまり経済的開発は，何よりも文化的開発と一体のものとして把握されていたのであった。

こうした考え方が，特殊なものではなかったことを示すために，なお若干の記事を紹介しておこう。たとえば「小アジアには，すでにドイツ資本が相当投下されており，ドイツ人技師や商人が，交通と文化を高めるために活躍している」[54]ことが誇らし気に報じられ，また「アジア・トルコを経済的に開発し，

51) *Deutsche Z.* v. 6. 11. 98.
52) *B. B. C.* v. 20. 11. 98.
53) *Nordd. Allg. Z.* v. 1. 2. 99.
54) *Schwäb. Merkur* v. 7. 2. 99.

そこに文化的諸力の生き生きとした流れを導き入れよう」[55]という提案がなされている。あるいはまた，バグダード鉄道建設に関しても，次のような期待が表明されるのである――「東の中国におけるように，西の小アジアにおいても，文化のためのアジアの開発ないし再開発が着手され始めた。それは今や，アナトリア鉄道が，メソポタミア内陸部へ向けて延長されることによって実現されるであろう。ユーフラテスとチグリスの間の地――信仰がその地を，人類の発祥地，パラダイスとしたのだ――が，ドイツの企業精神によって再び文化を手に入れるのを目のあたりにするという考え方には，独特の魅力があるものなのだ。」[56]

このように経済的開発と文化的開発とを結合させることによって，結果としては，キリスト教的・ヨーロッパ文化圏の，イスラム文化圏に対する優位を確証するという観点は，現代の十字軍思想の特徴である。この主張の隠された効果は，新旧両教の対立が，キリスト教対イスラム教の前では，主要な矛盾ではなくなるという点にある。皇帝旅行の宗教的成果が，新旧両教の国家への統合という内政的効果を持ち得たのは，現代の十字軍思想の裏打ちがあればこそであった。

こうした開発は，高度に発達した文明国ドイツが，低開発世界に対して果たすべき使命とみなされた。「ドイツは，小アジアの経済開発を指導した後には，シリアやパレスチナにおいても，同様の役割を果たさなければならない。それは一つの任務なのだ。皇帝のパレスチナ旅行は，この任務の遂行を大きく前へ進めたのであった」[57]というように，ドイツの国民的使命感にアピールする論潮は，皇帝旅行を通じて広まった膨脹を求める社会的雰囲気を，みごとに表現したものといえるであろう。

現代の十字軍思想の第3の特徴は，ドイツの手による経済的・文化的開発は，

55) *Berl. Neueste Nachr.* v. 31. 1. 99. *Berl. Börs. Z.* v. 31. 1. 99.
56) *Berl. Tageblatt* v. 13. 5. 99, zit. Rathmann, S. 207.
57) *Schles. Zeitung* v. 18. 1. 99.

トルコにとっても有利であるという考え方である。実は皇帝自身が旅行中に，「地中海のドイツ人が，故郷にしっかりと結びつけば結びつくほど，彼らはトルコ帝国にとって，文化を促進する要素となるであろう」[58]と述べていたが，独土関係の強化が，トルコにとってもプラスであることを強調する記事は多い[59]。

だが注意を払わなければならないのは，外国人の移入は，「たいていこの地にとって，文化の成長とみなされうるものである。落ち着いた態度，勤勉さ，思慮深さの点で傑出しているのは，まず第1にドイツ人である。……ドイツの制度とドイツの秩序愛好は，ここでは模範とされている」[60]という認識，あるいは，現在のトルコに決定的に欠けている管理能力と教育を，ドイツの浸透によって高めるという発想である[61]。つまりトルコにおいて将来の展望があるとすれば，それはドイツ流の文化と技術を「模範（Muster)」として受け入れる場合なのであった。この点を次の論説は，明確に述べている――「以前は列強が，他日彼らの手によって息を引き取らせようという，はっきりした目的の下に治療を試みた病人は，真の友人〔＝ドイツ，引用者〕の手によって，再び健康を回復するであろう。ただしそれは，総じて友人の文化的制度（Kulturverfassung）に従う場合にのみ，可能なことなのである。」[62]

ちょうどこの時期にあわせて刊行された『聖地からの画集。皇帝旅行への贈り物』は，もちろん時の新聞によってただちに紹介されたが，当時の雰囲気をよく伝えている。「著者は，現在の彼の地を支配している荒涼に対する慰めを，聖書の歴史にあるような，かつての豊かな地への回顧のうちに求めるだけではなく，更にドイツの自覚を体現するところの将来への期待のうちにも求めている。聖地を再び約束の地とするには，今の聖地に欠けているものがある。それ

58) *Deutsche Z.* v. 30. 10. 98.
59) たとえば *Köln. Z.* v. 30. 9. 98, *Frankfurt. Z.* v. 9. 11. 98, *Rein. Westf. Z.* v. 1. 2. 99.
60) *B. B. C.* v. 20. 11. 98.
61) *Berl. Neueste Nachr.* v. 2. 12. 98.
62) *Deutsche Z.* v. 6. 11. 98.

は，新しく強い，仕事に有能な種族なのだ。『我々の皇帝に続いて，聖地へ！』と著者は，末尾において叫ぶ。」[63]（強調は原文）移民奨励を示唆する結論部分は，論議を呼ぶところとはいえ，かつてオリエントに栄えた古代文化には敬意を表しつつも，現代ドイツの資本・技術と文化を押し出すことによって，ドイツ風のトルコ帝国をつくりあげるという思想は，次の論説では，一段とストレートに表現された。そこでは，トルコが長く培ってきた独自の生活文化を，ドイツの経済的・文化的開発力によって，全面的に併呑してしまおうという同化の論理が，はっきりと展開されている。長文になるが，重要なので引用しておきたい。

「もちろん我々の友情は，まずは全く私心のないものであり得る。我々はトルコを助け，鉄道を敷き，港を築く。彼らの中で工業がめざめることを，我々は追求する。我々は自分たちの信用で，トルコ人を援助する。彼らに艦船や大砲を，航海士と共に提供する。航海士たちは，この艦船の動かし方や大砲の並べ方を教える。我々は彼らにドイツ人官吏やドイツ軍人を貸与する。彼らは文民行政および軍事行政の最高位につき，まずもちろんトルコ帝国のために働く。『病人』は回復するであろう。病人は全く根本的に治療されるので，回復した時には，すっかり元とは変わってしまう。……我々の愛に満ちた抱擁によって，彼をドイツの体液でろ過してしまったので，彼はもはやドイツ人と区別できないのである。」[64]

こうして，一方におけるヨーロッパ文明揺籃の地としての輝かしい過去に対するロマンティックな憧憬，他方における現在の零落・貧困ぶりというコントラストから生ずるものは，オリエントは新興文明国ドイツの手によってのみ，経済的にも昔日の如く再興し得るという強烈な国民的意識と，トルコは，もはや自力では回復不可能だからこそ，ドイツの「文化事業」はトルコにとっても

63) *Alldeutsche Blätter* v. 16. 10. 98.
64) *Welt am Montag* v. 21. 11. 98.

有意義なのだ，という使命感であった。

IV 総　括

オリエントに秘められた経済的な可能性に対する期待は，1880年代末からのアナトリア鉄道建設と結びついて，一定程度は表明されてきたものの，世論の広範な関心を呼ぶには至っていなかった。，オリエント問題が，日常的に報道・評論されるようになった最大の契機こそ，皇帝のオリエント旅行にほかならない。皇帝夫妻一行の日々の行動について，次々と寄せられる詳細な特派員報告は，皇帝旅行にあわせて出版された地図や画集[65]とあいまって，一般国民の前に〈オリエント〉を一挙に引きずり出したのであった。

皇帝旅行に関する報道は，内容的にも形式的にもさまざまであるが，まず第II節では，それが，宗教・軍事・外政・経済の4つの側面において，多様な論潮で存在することを紹介すると共に，各側面が並列してあるだけではなく，相互に関連しあっていることが指摘された。次いで第III節では，その多様性の根底を貫いているところの，現代の十字軍論とも言うべき思想について，分析が試みられた。

今，その特徴をふり返るならば，まず第1に，後発帝国主義国の最高権力者が，同時に高度な技術文明の体現者として機能することを通じて，ドイツの威信を高め，世界強国にふさわしい国際的地位を主張したこと，第2に，経済的開発が文化的開発と結びつき，それが権力国家ドイツの使命と自覚されたこと，そして第3に，開発は，もはや自力では復興できない現地にとってプラスに作用するが，再建のためには，ドイツの技術的・文化的スタイルを受け入れること，すなわち同化されることによってのみ可能であるとみなされたこと，とし

65) たとえば，公式発表に従った旅行の道程が，交通手段や小旅行の細部に至るまで刻明に記された『ドイツ皇帝のパレスチナ旅行のための地図』や『聖地からの画集。皇帝旅行への贈り物』，あるいは詳細な索引を備えて，彼の地の概観のみならず，人口密度や交通施設さらに生産状況なども把握できるように作成された『小アジアの貿易および生産地図』が出版されている。*Alldeutsche Blätter* v. 16. 10. 98, *Berl. Börs. Z.* v. 13. 12. 98.

て総括できるであろう。

最後に，民族排外主義の浮上を皇帝旅行という具体的局面においてとらえようとした本稿が，一方では，バグダード鉄道政策の決定過程における世論の社会的役割の更なる分析に[68]，他方では，帝国主義的ナショナリズム一般の比較史的分析に[69]，それぞれ接続させられるべきことを展望して，稿を閉じたい。

(1985. 8. 15.)

68) 本稿は，前掲拙稿，188～9ページを補うものである。

69) 拙稿「帝国主義的ナショナリズムに関する覚書き」，関西大学『部落問題研究室紀要』9号(1983年11月)所収，を参照。